

街頭紙芝居を介して見つけた「子ども溜まり」エスノグラフィー

- 多様化する社会の中で公園に流れ集まる子どもたち -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
都築 みき

本稿では、実際に筆者がエスノグラファーとなり、現在の街頭紙芝居の場である「公園」に入るというフィールドワークを中心に据えたエスノグラフィーによって、昭和の文化を漂わせる「街頭紙芝居」が現代でどのような意味をもつのかについて考察した。

“ チョーンチョーン ” と拍子木の音が鳴り響く。戦前、そして戦後まだテレビが家庭に普及していない昭和 20 年代、30 年代に子どもたちの娯楽の一つとして、街頭紙芝居があった。現在、子どもたちを楽しませる娯楽品は多く溢れ、外で遊ぶことや沢山の子もたちが集まって遊ぶことは少なくなった。そんな中、大阪では今でもいくつかの公園で拍子木の音が鳴り響き、街頭紙芝居が子どもたちを楽しませている。子どもたちは公園の中で駄菓子を食べながら笑ったり、怒ったり、時には泣いたりしながら過ごす。紙芝居は強制されるものではない。ただ、そこには子どもたちが溜まる空間 - 「子ども溜まり」ができて、子ども同士の会話や子どもと親や先生でもない紙芝居師との会話が生まれたり、異年齢の子との関わりの中で譲る、教えるなど生きる上で大切なことを主体的に学ぶ子どもたちの姿が見られる。

公園に紙芝居師が来ることで、子どもたちに遊びがプラスされ、大きな子や小さな子、気の小さい子ややんちゃな子... 色々な子が水溜りのように流れ集まる子どもたちの空間ができる。その空間を「子ども溜まり」と呼ぶ。「子ども溜まり」は一見すると現代社会から取り残された空間である。しかし、その現代の多様な社会の中で「子ども溜まり」は子どもたちの群れる場所として子どもの変わらぬ姿を映し出している。むしろ現代だからこそ、ノスタルジーとは無関係に、<いま>を生きる子どもたちが公園の街頭紙芝居の空間に流れ、そして<いま>持つ力を外に向けて発散できる場としての「子ども溜まり」の姿が新鮮に浮き上がってきているのではないだろうか。

街頭紙芝居と「子ども溜まり」のこれからは先が見えない。しかし、<いま>、「子ども溜まり」を楽しむ子どもたちは確実にいる。だからこそ、この貴重な場に出会えたことに感謝するとともに、本研究における筆者とエスノグラフィーとの出会いが意味のあるものとなったことを強調したい。